今日の日は
頼まれ[illegible]持って、怪しい事務所を訪ねる。
『霊とか相談所』。近所にあるのは知っていたが、近寄ったことはない場所だった。
「どうぞ」
ノックをすると、落ち着いた男性の声が返ってきて、あれ、と思った。

今日の日は

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=22043874

モブサイコ100, 最上啓示, 大霊能力者におめでとう

最上さん誕生日Webオンリー、『大霊能力者におめでとう』展示作品です。最上さん、誕生日おめでとうございます!!
良ければお付き合いください🌸

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〰！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

今日の日は

頼まれた物を持って、怪しい事務所を訪ねる。
『霊とか相談所』。近所にあるのは知っていたが、近寄ったことはない場所だった。
「どうぞ」
ノックをすると、落ち着いた男性の声が返ってきて、あれ、と思った。
依頼人の声では無かった。
ドアを開けて、ますます困惑する。
濃灰色の髪、少し垂れた漆黒の瞳、薄い血色の悪い唇。整った顔はしているが、草臥れた印象は拭えない。何処か頓着して無く見えるモスグリーンのスーツに、見覚えがあった。誰かは思い出せないが……。
「それは何かな？」
作り笑いをして男性が私の手元を指差す。
「お届け物です。こちらに居る筈の……べっこう飴みたいな色の髪をした、グレースーツの男性に……」
「中身は　なんだと　訊いている」
私が品物を言わなかったのが気に入らなかったらしい。男性は声を低めて、ぽっかりと眼窩を開き、少しずつ巨大化して……はあああ！？！？
「毒か？呪いか？それからは悪意が感じられる。この私相手に、つまらないことをしてくれる！」
「ち、違いますッ！」
私は依頼人のことを思い浮かべて箱を庇う。
が。
箱は奪われ。
私は家までの記憶を失い。
後日依頼人に平謝りされた。

上手く行ったのなら、良かった。

※

「うわッ！？最上さん、あのお兄さんから箱受け取っちゃったのか！！しまったな、箱の受け取り時間早くし過ぎた……」
「これは何だ？私をわざわざ召喚まがいまでして、祓いでもしようと言うのかね？」
「……モブがな。ちょっと待っててくれ」
「影山君が？」
ほどなく、茂夫が相談所のドアをくぐる。
「あっ、それ最上さんが受け取っちゃったんですか」
僅かばかり無表情な目を茂夫は見開く。
「だからこれは何だと」
「最上さん、お誕生日おめでとうございます」
陰鬱そうだった目が見開かれていく。
「それ、本当はサプライズで出そうと思っていたケーキです。どうぞ開けてください」
「……私を驚かせてやろうと言う悪戯心が悪意に思えたのか……」
箱を開けると、こぢんまりとしたフルーツケーキが丸く鎮座していた。
「酔狂だね、キミたち」
最上啓示は苦笑する。
「最上さん、お誕生日おめでとうございます」
「おめでとう」
せっせと蝋燭を挿す霊幻を眺めながら、最上は瞳を曇らせる。
「本当に私が生まれたことは、めでたいことだったのだろうか」
「最上さん……」
茂夫が言葉に詰まる。
「アンタにとってはどうだったんだろうな。でも他人に取っては嬉しいことだったろうよ。最上さんのおかげで助かった人がゴマンといる。俺も記事やテレビ番組でしか知らないが。こうやって誕生日を祝うのも他人の自己満足に過ぎない。だから気に入らなきゃスッと不可視化すりゃ良いと思うぜ」

霊幻は蝋燭に火をつけて顔を上げる。
「あのッ！……僕は、最上さんと出会えて気付けた事があって……それに感謝してます。だから、最上さんと会えて良かったと思うし……最上さんが生まれてきてくれて、良かったと思います」
霊幻は冷や汗を流しながら言葉を紡ぐ弟子に肩をすくめる。
最上は何処か寂しそうに目を細めて、スゥッと姿を消した。

ケーキの端っこを一口だけ齧って。

「……」

霊幻は蝋燭を吹き消した。

おしまい。

最上啓示様、お誕生日おめでとうございます！！！！